

文献抄録における日本の家族介護者を対象とする看護研究の動向と課題

Abstract Review of Nursing Research of Japanese Family Caregivers

新田 静江
NITTA Shizue

要旨

わが国の介護状況は長期化・重度化・高齢化しているものの、世帯の小規模化や女性の就業率の上昇などから家族介護力は低下傾向にあり、要介護者とその家族を支援することは、看護職の重要な責務になってきている。本稿では、2005年～2008年7月に発行された文献を医学中央雑誌web版にてキーワード「家族介護者」を用いて検索された抄録のある原著論文で紀要や地方学会誌などを除外した専門誌に発表されている日本人の家族介護者を対象としている研究論文54件を抽出し、論文抄録をレビューすることで家族介護者研究の現状を明らかにするとともに、今後の課題について討議した。

キーワード 文献レビュー, 抄録, 家族介護者, 日本人, 看護研究

Key Words Literature Review, Abstract, Family Caregiver, Japanese, Nursing Research

I. はじめに

わが国では、介護保険法により要支援・要介護と認定された者は、約440万人となっており、毎月延べ260万人余りが居宅サービスを利用しながら在宅で生活している¹⁾。このような在宅における要支援・要介護者数の増加に加え、医療技術の進歩、在院日数の短縮、老年人口の増加は、介護の長期化、医療処置度の深刻化・重度化をもたらしている。一方、単独世帯や夫婦のみ世帯などの世帯の小規模化や伝統的に介護役割を担っていた女性の就業率の上昇などから、在宅での家族介護力は低下傾向にあることから、要支援・要介護者とその家族を支援することは、現在看護職の重要な責務になってきている。

そこで本稿では、家族介護者を対象とする日本語論文抄録をレビューすることで家族介護者研究の現状を明らかにするとともに、今後の課題について討議する。

II. 文献の抽出と区分

レビュー対象とする文献は2005年～2008年7月に発行された文献とし、医学中央雑誌web版にてキーワード「家族介護者」を用いて検索された2,155件の中から、抄録のある原著論文430件を検索した。さらに紀要、地方学会誌、日本看護学会論文集、会議録、事例報告および文献レビューを除外し、日本人の家族介護者を対象としている研究論文54件を、本稿の文献レビューの対象抄録として抽出した。

抽出した家族介護者に関する文献抄録は、表1に示した通り研究デザインにより、観察又は面接にて収集したデータを質的に分析した「質的研究」(因子探索研究)(n=17, 31.5%)、調査や測定にて収集したデータを統計的に分析した「相関・関連研究」(関係探索・関連検証研究)(n=35, 64.8%)および実験介入にて因果

表1 家族介護者研究における要介護者特性と研究デザイン別割合

要介護者特性	質的 n(%)	相関・関連 n(%)	実験・介入 n(%)	合計 n(%)
高齢者	5	13	1	19(35.2)
認知症	4	9		13(24.1)
神経難病	3	1		4(7.4)
終末期ケア	1	2		3(5.6)
医療処置	2	1		3(5.6)
その他	2	9	1	12(22.2)
合計 n(%)	17(31.5)	35(64.8)	2(3.7)	54(100)

受理日：2008年8月20日

山梨大学大学院医学工学総合研究部

Interdisciplinary Graduate School of Medicine and Engineering, University of Yamanashi

表2 家族介護者を対象とする質的研究

要介護者	著者名(発行年)	研究目的	分析手法	結果
高齢者	高橋ら(2006) ²⁾	高齢者夫婦2人暮らしの介護者の内的心情を探求	未記入	継続意思要素は8つと、妨げ要素6つが抽出された。
	安藤ら(2005) ³⁾	高齢夫婦のみ世帯での介護者のニーズを探求	内容分析	生活の継続、健康、資源、快く過ごさせたいなど、11の配偶者ニーズを抽出
	島内ら(2005) ⁴⁾	百寿者のソーシャルサポートを要介護者、主介護者、支援者から捉える	未記入	支援の多少に関らず、要介護者と主介護者で築いた関係が介護負担感に影響する。
	谷本(2005) ⁵⁾	在宅ケア導入における意思決定プロセスと要因を探求	未記入	導入疎外要因は2つ、導入肯定要因3つが見いだされた
	永田ら(2005) ⁶⁾	訪問看護・介護介入をセルフケア能力の向上を焦点に検討	未記入	療養困難の構成要素6つ、セルフケア能力向上への16介入を抽出
認知症	加藤ら(2005) ⁷⁾	介護者会の活動発展プロセスを記述	グラウンデッド・セオリー	特定の個人、多くの住民・関係者、地域全体へと活動を拡大していた。
	西山(2005) ⁸⁾	認知症高齢者の介護者の生活再構成に必要なものを記述	帰納的	実践で介護力をつけ、深い情と新たな意識で緊張感のない自然なものを導いていた
	小林(2005) ⁹⁾	認知症の妻の男性介護者の介護認識とその影響要因を探求	帰納的	介護引き受けと継続を規程する要因と、21の影響要因が明らかになった。
	野村ら(2005) ¹⁰⁾	農村の初期認知症高齢者と配偶者の生活を記述	未記入	要介護者ニーズ、介護者ニーズ、周囲の援助者との関係が見いだされた
神経難病	平野(2008) ¹¹⁾	在宅人工呼吸療法を行なうALS患者の家族介護者の願いや要望を探求	未記入	負担軽減、健康・将来、関係の改善、療養環境向上への願いや要望
	村岡(2007) ¹²⁾	ALSの夫を介護した未亡人の記憶の断片化を検討	記述的	困惑した出来事の反復、消去困難な出来事など5つのカテゴリーを抽出
	斎藤ら(2005) ¹³⁾	在宅人工呼吸療法を行なうALS患者の家族の介護に関する認識を探求	未記入	療養開始までの困難、現在は傾聴、呼吸管理、病状進行、疲労が困難
終末期ケア	谷口ら(2005) ¹⁴⁾	癌患者の在宅ターミナルケアへの移行過程と関連要因を分析	内容分析	移行準備は「ターミナルケア」「在宅ケア」「介護者」、関連要因は5つ
医療処置	樋口ら(2007) ¹⁵⁾	家族介護者が医療処置に慣れる過程での体験の意味を探求	帰納的	「退院指導の効果と課題」「緊張と疲労」「支援」「責任と誇り」が抽出された
	渡邊ら(2005) ¹⁶⁾	介護者による気管内吸引カテーテル管理の現状と課題を探求	未記入	カテーテル管理方法は医療者に習ったと認識しているが、基準に添っていない
その他	安田ら(2005) ¹⁷⁾	介護者の介護体験の内容と認識の肯定的側面を探求	未記入	介護方法の習得、家族の協力、対象者理解、意識変化など7つが見いだされた
	新井(2005) ¹⁸⁾	摂食・嚥下障害の主介護者の介護経験を探索	未記入	見ていける、揺らぎと知恵、葛藤と知恵、共存、やっていけるなどの7局面

関係を検証した「実験・介入研究」(n=2, 3.7%)の3つに分類した。さらに、家族介護者が介護する要介護者の特性に基づき、高齢者(n=19, 35.2%)、認知症(n=13, 24.1%)、神経難病(n=4, 7.4%)、終末期ケア(n=3, 5.6%)、医療処置(n=3, 5.6%)、その他(n=12, 22.2%)で区分した。

III. 研究の現状

以下に、質的研究(表2)、関連・関連研究(表3)、実験・介入研究(表4)に区分された文献抄録をレビューし、研究の現状を記載する。

1. 質的研究

家族介護者を対象とする質的研究は17件で全体の31.5%を占めている。要介護者特性でみると高齢者が最多の5件、次いで認知症(n=4)、神経難病(n=3)、医

療処置(n=2)、その他(n=2)、終末期ケア(n=1)であった(表1)。

表2に示した研究目的と結果をみると、心情・ニーズ・認識・経験・記憶とその要因²⁾³⁾⁹⁾¹¹⁾¹²⁾¹³⁾¹⁵⁾¹⁷⁾¹⁸⁾、意思決定や看護・介護やケア移行および家族会活動のプロセス⁵⁾⁶⁾⁷⁾¹⁴⁾、生活⁸⁾¹⁰⁾、ソーシャルサポート⁴⁾、処置手技¹⁶⁾を探求するものであった。また、質的データの分析手法は、帰納的分析⁸⁾⁹⁾¹⁵⁾、内容分析³⁾¹⁴⁾、およびグラウンデッドセオリー・アプローチ⁷⁾であった。

帰納的分析を用いた西山⁸⁾は、認知症高齢者と共に暮らす家族介護者5名の参加観察と面接を通して、家族介護者が有していた「介護の備え」を基盤に、「実践しながら介護力をつける」「情を深くする」「新たな意識を持つ」ことを繰り返しながら、緊張感のすくない自然な生活を再構成していることを明らかにしている。小林⁹⁾は、認知症の妻を介護する夫介護者5名における「介護する意思」が介護の引き受けを、「在宅介護を継続でき

表3 家族介護者を対象とする相関・関連研究

要介護者	著者名(発行年)	研究目的	N(回収率)	結果
高齢者	木村ら(2007) ¹⁹⁾	特養入所者の主介護者のQOLを把握し、関連要因を究明	80(58.4)	SF-36測定でのQOLは標準値より低く、在宅介護者より高い。低さは女性、通院中、無職、同居に関連
	倉澤ら(2007) ²⁰⁾	要介護者と介護者の負担感の地域差を検討	未記入	都市部で高齢者の自立度が低く、介護時間が長く、負担感が強いが顕著ではない
	桜井ら(2006) ²¹⁾	主介護者の睡眠実態を究明	186(60.5)	睡眠時間の短縮、頻回な中途覚醒、熟眠感欠如であった。
	町田ら(2006) ²²⁾	介護者の健康増進プログラム検討のために、健康状態を調査	8,486(16.6)	介護者の8割は健康不安があり、7割は治療中であった。
	上村ら(2006) ²³⁾	介護負担感尺度日本語版の短縮版の妥当性と信頼性の追試を実施	222(不明)	構成概念妥当性、並存的妥当性、因子妥当性と信頼性が確認された
	鷺尾ら(2005) ²⁴⁾	介護保険導入前後における負担感の変化を検討	未記入	寝たきりと認知症の問題行動は減少、外出頻度と抑うつ割合は変動している。
	広瀬ら(2005) ²⁵⁾	家族介護者の介護に対する認知的評価尺度を検証	236(55.2)	活動制限感、継続不安、充足感、親近感などの6因子と、妥当性と信頼性を確認
	広瀬ら(2005) ²⁶⁾	家族介護者の肯定的評価に関連する要因を検討	243(55.2)	充足感は年令、訪問看護、家族会満足度と、感情はインフォールサポートに関連あり
	大浦ら(2005) ²⁷⁾	介護保険導入前と4年後の介護者の負担感を調査	40(90.9)	負担感、寝たきり、抑うつは低下し、デイケアサービス利用は3.4年目に減少
	広瀬ら(2005) ²⁸⁾	介護者の認知的介護評価と要介護者のADLの関連を検討	440(56.7)	ADLと負担感は負の相関を示し、充足感は食事と整容の低い場合に高い傾向あり
	三浦ら(2005) ²⁹⁾	要介護者と介護者との言語コミュニケーション満足度の関連を究明	85(不明)	満足度に両者間一致なし、要介護者の情報理解能と介護者の負担感が関連要因
	深堀ら(2005) ³⁰⁾	特養入所者の主介護者の精神的健康と関連要因を究明	145(76.7)	精神的健康は、ソーシャルサポートを受けている人ほど高く、面会時間が長い人ほど低い
	鷺尾ら(2005) ³¹⁾	北海道農村部の介護者の負担感への影響要因を検討	51(不明)	負担感、女性、認知症高齢者の介護、精神的疲労の強さに関連していた
	認知症	佐伯ら(2008) ³²⁾	認知症高齢者の家族介護者の家族機能と介護負担感を究明	99(不明)
松本(2007) ³³⁾		認知症高齢者の介護者の医療ニーズ測定尺度を開発	未記入	妥当性と信頼性を備えた3因子12項目の医療ニーズ尺度を構築した
中原(2005) ³⁴⁾		認知症高齢者の介護者の負担感と介護態度の関係を究明	113(53.8)	負担感は燃えつき型で増加、受容・割り切り型・積極的関わり型・資源活用型で軽減
小澤(2006) ³⁵⁾		認知症高齢者と介護者の統柄と介護評価の相違を検討	118(不明)	配偶者は肯定的、義父母介護者は健康面に否定的であった
廣瀬(2006) ³⁶⁾		認知症患者の介護者の非死喪失、介護サポート、予期悲嘆の関係を検討	144(不明)	非死喪失とサポートは予期悲嘆に、絆の喪失と嫌気・孤独が介護者の健康に影響していた
水島ら(2005) ³⁷⁾		日本とイギリスの介護者の認知症行動障害の認識の相違を検討	141 & 69	日本で興奮すると応対困難が、イギリスで夜中に騒いだり出て行くが有意に高かった
小澤ら(2005) ³⁸⁾		認知症高齢者の家族介護者の介護評価要因を検討	103(不明)	肯定的要因は抑うつ、親密度、サポート、否定的要因はそれに加え問題行動、介護度
東野(2005) ³⁹⁾		問題行動と介護負担感の関係を究明	252(不明)	問題行動の感情統制困難が拒否感情と活動制限感に、被害妄想が拒否感情に影響
丸山ら(2005) ⁴⁰⁾		認知症患者の介護者の負担感とサービス利用状況を調査	48(不明)	配偶者は抑うつ傾向が強く、サービス利用日数は重症度と身体機能と1関連
神経難病		尺土ら(2007) ⁴¹⁾	在宅療養に移行した神経難病患者家族の生活実態を究明	未記入
終末期ケア	松村ら(2006) ⁴²⁾	主介護者の満足感に影響する在宅ターミナルケアの要素を究明	127(84.0)	満足度に関連要因は死亡間近の訪問、ケア方法の提示、不安への対応、グリーンケア
	石井ら(2005) ⁴³⁾	家族の高齢者看取り過程の介護行動尺度を作成し、影響要因を分析	222(65.7)	3行動因子を抽出、影響要因は介護者の性、治療方針、看取り後の受け止め感
医療処置	片山ら(2006) ⁴⁴⁾	女性介護者の在宅準備状況とウェルビーイングの影響を究明	145(69.6)	介護スキルと役割遂行可能感が準備状況、これらが高いことは否定的感情が低い

	川野ら(2008) ⁴⁵⁾	男性介護者の日常生活と家族の生活力量を究明	65(不明)	訪問サービス利用傾向があり、問題対処力・資源活用が高く、調整力は低い
	藤野ら(2007) ⁴⁶⁾	精神障害者の家族介護者の介護の肯定的認識と関連要因を検討	30(不明)	「学びと意義」には介護と罹病期間、因子「要介護者との関連」には介護継続意思が抽出
	梶原ら(2005) ⁴⁷⁾	RAの主介護者の介護状況と負担感を究明	71(不明)	負担感は低いが、疲労兆候と関連している
	佐藤ら(2005) ⁴⁸⁾	女性介護者の蓄積的疲労の実態を究明	175(不明)	蓄積的疲労は、妻が高く、嫁はイライラ感と抑うつ状態が高かった
その他	大須賀ら(2005) ⁴⁹⁾	訪問看護ステーションの時間外電話相談の実態を究明	99(不明)	電話は、医療処置特に膀胱留置カテーテル、吸引、胃瘻に有意に多い
	比嘉ら(2005) ⁵⁰⁾	在宅療養者の介護者のスピリチュアリティを究明	20(不明)	一番の支え、周囲への感じ、自分の今後がスピリチュアリティを高める3要因
	飯田ら(2005) ⁵¹⁾	介護負担尺度の信頼性と妥当性を検討	82(不明)	信頼性と妥当性、点数分布を確認した
	宮谷ら(2005) ⁵²⁾	在宅人工呼吸療養中の就学児の介護実態を究明	51(33.6)	介護時間の平均は8時間、入浴と夜間介護に負担感が大きかった
	橋本(2005) ⁵³⁾	介護の否定的認識と肯定的認識を把握するための尺度を開発	20(不明)	拘束感、孤立感、充実感で構成する尺度を開発し、信頼性と妥当性を確認した

る見通しの保持」が介護継続を規定していると報告している。樋口ら¹⁵⁾は、家族介護者(N=18)が医療処置に慣れる過程で、「退院指導の効果と課題」「処置に慣れるまでの緊張と疲労の蓄積」「専門職・家族の支援」「責任と誇り」を体験していると報告している。

内容分析を用いてがん患者を看取った主介護者(N=15)を対象とした谷口ら¹⁴⁾は、在宅ターミナルケアへの移行には、「ターミナルケアの準備期」「在宅ケアの準備期」「介護者の準備期」があり、症状コントロールと緩和ケア、支援体制の整備、介護技術の習得、副介護者の確保が関連要因であると報告している。同様に内容分析を用いて安藤ら³⁾は、配偶者である介護者(N=6)は、2人での「生活を続けたい」「心身ともに健康でいたい」など11のニーズをもっていることを明らかにしている。

グラウンデッドセオリー・アプローチを用いた加藤ら⁷⁾は、認知症高齢者の介護者の会のメンバー(N=13)の面接と参加観察を通して、活動対象を介護者の会から特定の個人や地域住民へと活動対象を拡大させていることを捉えている。これら6研究以外の抄録からは分析方法を読み取ることが出来なかった。

これらの質的研究結果は、当事者である介護者がどのような思いや心情で家族介護を担っているのかといった家族の内面を理解するための貴重な資料となっている。

2. 相関・関連研究

相関・関連研究はレビューした抄録の約2/3(64.8%)を占める35件で、要介護者の特性は高齢者13件、認知症9件、神経難病1件、終末期ケア2件、医療処置1件、その他9件であった(表1)。

対象者数は20人～8,486人、記載されている回収率又は配布数と回収数記載から算出できる回収率は16.6%～90.9%であった。レビューした文献抄録のうち、回

収率未記入は約半数の17件、対象者数および回収率共に未記入は4件となっている。研究目的をみると、介護負担感などの否定的側面^{20) 24) 27) 31) 32) 34) 39) 40) 47)}、満足感などの肯定的側面^{26) 29) 42) 46)}、介護の否定的側面と肯定的側面評価^{28) 35) 38)}、健康・QOL^{19) 21) 22) 30) 44) 48)}、生活^{41) 45) 52)}、その他の家族介護者実態^{36) 37) 49) 50)}などの究明、および尺度開発^{23) 25) 33) 43) 51) 53)}となっていた(表3)。

介護の否定的側面の測定に日本語版 Zarit 介護負担尺度を用いた複数の研究があり、鷲尾ら³¹⁾は、要介護高齢者の主介護者(N=51)の介護負担感に女性という性別、認知症に伴う問題行動の多さ、拘束時間の長さ、外出時間の制限、精神的疲労が関連していることを、丸山ら⁴⁰⁾は、認知症の家族介護者(N=48)の負担感に認知症の重症度、サービス利用日数、身体機能の重症度と関連していると報告している。梶原ら⁴⁷⁾は、関節リウマチ患者の家族介護者(N=71)の介護負担感に低いものの、疲労兆候と密接に関連していることを明らかにしている。一方、東野³⁹⁾は、要介護高齢者問題行動指標と介護負担感指標を用いた調査(N=252)で、高齢者の「感情統制困難」が介護者の拒否感情と活動制限感に影響し、「被害妄想」が拒否感情に影響していることを報告している。しかし、その他の抄録には否定的側面の測定方法についての記載は見当たらない。

介護の肯定的側面について松村ら⁴²⁾は、看取りを体験した介護者(N=127)の訪問看護ケアに関する満足度スケールを用いて測定した満足度の高かったケア要素は「死亡間近の訪問」「療養者へのケア方法の提示」「不安への対応」「グリーフケア」と報告している。藤野ら⁴⁶⁾は、肯定的認識を評価する尺度を用いて測定した介護からの学びと意義には罹病期間が、要介護者との関連性には介護継続意思が関連していることを明らかにしている。

介護の否定的側面と肯定的側面を評価した研究として、広瀬ら²⁸⁾は、介護者(N=440)の介護負担感と満足

表4 家族介護者を対象とする実験・介入研究

要介護者 著者名(発行年)	研究目的	対象者 対象数	実験・介入	結果
高齢者 二村ら(2006) ⁵⁴⁾	自動体位変換機能付き体圧分散寝具の効果検討	寝たきり高齢者と家族5組 介入1→ 介入2	介入1(自動体位変換機能作働寝具+頭部・四肢位置補正) 介入2(自動体位変換機能停止寝具+介護者による体位変換)	自動体位変換機能作働寝具は、体圧分散効果あり
その他 真砂ら(2005) ⁵⁵⁾	精油噴霧の疲労改善効果を検証	兄の家族介護者11名 介入群→ 対照群 or 対照群→ 介入群	介入群(精油噴霧室で10分休憩を1週間) 対照群(部屋で10分休憩を1週間)	介入群で不安感が有意に低下 両群で蓄積的疲労兆候の訴え低下

感は要介護高齢者のADL得点と負の相関関係があり、ADLが中程度で負担感が高く、排泄・入浴・着替えにおける要介助で負担感が高まると報告している。小澤ら³⁸⁾は、認知症高齢者の家族介護者(N=103)の介護に対する肯定的および否定的介護評価の規定要因は、介護者の抑うつと要介護者との親密度および家族や友人のサポートであり、否定的評価の規定要因は問題行動と要介護度であると報告している。その後小澤³⁵⁾は、認知症高齢者の家族介護者(N=118)の続柄(義父母、実父母、配偶者)別に介護に対する評価を比較し、配偶者介護者は義父母介護者より情緒的側面で肯定的であり、義父母介護者は実父母介護者より健康面から否定的であることを明らかにしている。

介護者の健康・QOLについて、町田ら²²⁾は、在宅介護サービス利用者の家族介護者(N=8,486)のうち健康不安は約8割、加療中は約7割、生活犠牲感は6割以上にみられると報告している。木村ら¹⁹⁾は、特別養護老人ホーム入所者の家族介護者(N=80)のSF-36で測定したQOLが国民標準値より低く、在宅家族介護者より高いことを見出している。同様に老人ホーム入所者の家族介護者(N=145)を対象とした深掘ら³⁰⁾は、精神的健康はソーシャルサポートを受けている介護者で高く、面会時間の長い人ほど低い傾向を報告しているが、精神的健康の測定については抄録に未記入である。片山ら⁴⁴⁾は、自宅退院する医療依存度の高い療養者の介護者145名の在宅介護移行への準備状況としての「介護スキル」の高い介護者ほど否定的感情は低く、「介護役割遂行可能感」の高い介護者ほど否定的感情は低く、肯定的感情は高いことを明らかにしている。介護者の睡眠状態について桜井ら²¹⁾は、2人世帯の介護者で睡眠時間の短縮、頻回な中途覚醒、熟睡感欠如がみられ、睡眠障害の高リスクは、人工呼吸器や気管切開や中心静脈栄養管理を受けている療養者の介護者、腰痛又は肥満のある介護者であると報告しているが、睡眠状態の測定方法については記載されていない。佐藤ら⁴⁸⁾は、女

性介護者(N=175)の蓄積的疲労兆候を測定し、妻介護者が嫁・娘より身体不調と一般的疲労感が有意に高いと報告しているが、要介護状態との関連については分析していない。

生活については、尺土ら⁴¹⁾が神経難病患者の家族介護者が在宅移行への不安があったものの患者の喜ぶ姿を原動力にして生活している介護者が多く、気管切開又は胃瘻造設患者が通所サービスや短期入所サービスに受け入れてもらえないことを問題点として見出している。川野ら⁴⁵⁾は、「家族生活力量アセスメントスケール簡易版」を用いた調査で、男性介護者(N=65)の生活力量充足度は健康問題対処力と社会資源活用力に高く、関係調整・統合性に低い傾向を見出している。在宅人工呼吸療法中の小学校から高校までの就学児51名の家族介護者を対象とした宮谷ら⁵²⁾は、介護時間の平均は約8時間で、入浴と夜間の介護に負担感が強いと報告しているが、負担感の測定方法について抄録からは読み取れない。

その他の家族介護者実態について大須賀ら⁴⁹⁾は、訪問看護ステーションにおける時間外電話相談の実態を調べ、膀胱留置カテーテル・吸引・胃瘻などの医療処置を受けている利用者の家族からの相談が有意に多いと報告している。水島ら³⁷⁾は、日本とイギリスにおける行動障害のある在宅認知症高齢者の介護者を比較し、廣瀬³⁶⁾は、在宅認知症患者の家族介護者の非死喪失と介護サポートと予期悲嘆を構成するカテゴリーを明らかにしている。比嘉ら⁵⁰⁾は、数量化I類分析によりSpirituality評定尺度で測定したスピリチュアリティを高くする要因として、支えになる人の存在、周囲に対して肯定的であること、および自分のこれからの希望をもつことの3要因を見出している。

尺度開発に関しては、認知的介護評価尺度²⁵⁾、介護負担度評価尺度ABC-16⁵¹⁾、Zarit介護負担尺度日本語版の短縮版²³⁾、看取る過程の介護行動尺度⁴³⁾、医療ニーズ測定尺度³³⁾、介護の否定的認識と肯定的認識を包括

する尺度⁵³⁾が開発され、内容妥当性・構成概念妥当性・並存的妥当性・因子妥当性および内的整合性による信頼性などが確認されている。これら開発された尺度は文献が出版されて以降、極一部が開発者らの研究で使用されているように見受けられる。

3. 実験・介入研究

実験・介入研究は2件(3.7%)であり、要介護者特性は高齢者⁵⁴⁾1件とその他⁵⁵⁾1件であり、いずれも同一対象群への介入の有無を比較するデザインを用いている(表4)。

二村ら⁵⁴⁾は、自動体位変換機能付き寝具の体圧分散と介護負担感軽減効果を検討するために、寝たきり高齢者と介護者5組に、介入群として自動体位変換機能作動状態で介護者が頭部・四肢位置補正を2週間実施し、対照群として変換機能を作動させずに通常の体位変換介助を2週間実施して比較している。その結果介入による同一部位における圧迫軽減による体圧分散効果を検証している。また、介護負担感軽減効果はないことが示されているが、体位変換介助より介入としての位置補正が介護者の疲労感、腰痛、睡眠障害などの軽減ではなく、介護負担感を軽減しようと仮定した根拠への疑問が残る。

真砂ら⁵⁵⁾は、精油の介護疲労効果を検証するために、小児の家族介護者11名に、精油を噴霧した室内での10分間休憩を1週間実施する介入を実施し、噴霧しない室内での同様休憩を実施する対照における蓄積的疲労兆候を比較し、介入による疲労兆候としての不安感の有意な低下が見出されている。本研究では、介入と対照いずれにおいても疲労兆候の訴えは減少していることから、介護者の疲労兆候低下への精油噴霧の有無に関わらない10分間休憩継続の有効性が推測される。

IV. 今後の課題

本稿レビューした日本人の家族介護者を対象とする学会誌や専門誌に掲載されている日本語論文抄録には、3つの課題があらわれている。1つ目は、質的研究および相関・関連研究結果は、家族介護者とそれを取り巻く状況を理解する資料を提供しているものの、質的研究の分析方法、相関・関連研究の対象者数・回収率、測定方法などの未記載割合が高かったことから、家族介護者を対象とする先行研究の検討を推進させるためには、研究方法の詳細が読み取れる抄録記載は課題であろう。2つ目は、相関・関連研究における結果の比較や蓄積をすすめるために、測定する概念や測定方法の明確化をはかるとともに共有し、協働して研究を推進していくことが課題と思われる。3つ目は、家族介護者

を支援する効果的な看護実践を確立させるための実験・介入研究を推進させることが応用科学としての看護科学にとっての大きな課題である。因果関係の検証にはランダム化並行群間比較実験が最も望ましいが、同一対象群への介入の有無を比較し、科学的根拠のある変数で効果を測定していく準実験研究デザインの活用は、対象者確保の困難さと多様性の著しい家族介護者を対象とする看護研究を推進させるであろう。

文献

- 1) 厚生労働省(2007)平成18年度介護保険事業状況報告(年報)の概要. <http://www-bm.mhlw.go.jp/topics/kaigo/osirase/jigyoo/06/dl/02.pdf>
- 2) 高橋甲枝, 井上範江, 児玉有子(2006)高齢者夫婦二人暮らしの介護継続の意思を支える要素と妨げる要素. 日本看護科学会誌, 26(3): 58-66.
- 3) 安藤恵美, 大野真理子, 岡本有里, 他(2005)高齢夫婦のみの世帯で介護を行う配偶者のニード. 家族介護, 3(2): 112-122.
- 4) 島内晶, 佐藤真一(2005)百寿者をめぐるソーシャル・サポートの三者モデル. 高齢者のケアと行動科学, 10(2): 48-52.
- 5) 谷本千亜紀(2005)要介護者を介護する家族介護者の在宅ケアサービス導入における意思決定プロセスと要因. 日本看護学会誌, 14(2): 61-68.
- 6) 永田千鶴, 東清巳(2005)在宅療養が困難な状況下で高齢者とその家族を支えた訪問看護・介護介入セルフ能力の向上に焦点を当てて. 日本地域看護学会誌, 8(1): 31-40.
- 7) 加藤典子, 麻原きよみ(2005)住民グループのメンバーが活動を地域に発展させていくプロセス 認知症高齢者(痴呆性高齢者)の介護者グループに焦点を当てて. 日本地域看護学会誌, 7(2): 13-19.
- 8) 西山みどり(2005)ともに暮らす高齢者の認知症発症に伴う主介護者の生活再編成. 老年看護学, 9(2): 85-91.
- 9) 小林陽子(2005)認知症の妻を介護する高齢男性の介護認識とその影響要因. 老年看護学, 9(2): 64-76.
- 10) 野村美千江, 大名門裕子(2005)農村に暮らす初期痴呆高齢者と配偶者の生活特性とその全体像. 日本看護研究学会雑誌, 28(1): 91-100.
- 11) 平野優子(2008)在宅人工呼吸療法を行うALS患者の家族介護者の願いと社会への要望 訪問看護・介護職に求められる家族支援のあり方. 訪問看護と介護, 13(6): 494-498.
- 12) 村岡宏子(2007)筋委縮性側索硬化症患者の遺族にみられた記憶の断片化. 日本保健科学学会誌, 10(3): 139-149.
- 13) 斎藤明子, 大竹まり子, 小林淳子(2005)在宅筋委縮性側索硬化症患者の家族介護者の介護に関する認識. 日本難病看護学会誌, 10(2): 117-129.
- 14) 谷口友理, 松浦和代(2005)がん患者の在宅ターミナルケアへの移行過程に関する研究. 日本看護研究学会雑誌, 28(4): 27-42.
- 15) 樋口キエ子, 丸井英二, 田城孝雄(2007)重度要介護者の家族介

- 護者が医療処置に慣れる過程で体験する出来事の意味. 家族看護学研究, 13(1) : 29-36.
- 16) 渡邊久美, 犬飼昌子, 千田好子, 他(2005)介護者による気管内吸引カテーテル管理の現状と課題. 訪問看護と介護, 10(8) : 666-673.
- 17) 安田貴恵子, 北山三津子, 嶋澤順子, 他(2005)家族介護者の介護体験の内容と認識の肯定的側面. 日本地域看護学会誌, 8(1) : 88-93.
- 18) 新井香奈子(2005)摂食・嚥下障害者の主介護者の介護経験 主体的な介護の取り組み. 痛と化学療法, 32(Suppl. I) : 50-52.
- 19) 木村誠子, 片岡万里(2007)特別養護老人ホーム入所高齢者の家族介護者における QOL とその関連要因 SF - 36 による検討. 老年看護学, 12(1) : 94-100.
- 20) 倉澤茂樹, 吉益光一, 鷺尾昌一, 他(2007)訪問看護を利用する要介護高齢者における家族の介護負担感の地域差. 老年精神医学雑誌, 18(7) : 771-780.
- 21) 桜井志保美, 前川厚子, 竹井留美, 他(2006)訪問看護を受ける在宅療養者の主介護者における睡眠障害の実態. 保健の科学, 48(10) : 783-790.
- 22) 町田いづみ, 保坂隆(2006)高齢化社会における在宅介護者の現状と問題点 8486 人の介護者自身の身体的健康感を中心に. 訪問看護と介護, 11(7) : 686-693.
- 23) 上村奈美, 新田静江, 飯島純夫, 他(2006) Zarit 介護負担尺度日本語版の短縮版 (J-ZBI-8Y) における妥当性と信頼性の追試. 厚生指標, 53(3) : 15-20.
- 24) 鷺尾昌一, 荒井由美子, 大浦麻絵, 他(2005)介護保険導入後の介護負担と介護者の抑うつ導入前から 5 年後までの訪問看護サービス利用者を対象とした調査から. 臨床と研究, 82(8) : 1366-1370.
- 25) 広瀬美千代, 岡田進一, 白澤政和(2005)家族介護者の介護に対する認知的評価を測定する尺度の構造 肯定・否定の両側面に焦点をあてて. 日本在宅ケア学会誌, 9(1) : 52-60.
- 26) 広瀬美千代, 岡田進一, 白澤政和(2005)家族介護者の介護に対する肯定的評価に関連する要因. 厚生指標, 52(8) : 1-7.
- 27) 大浦麻絵, 鷺尾昌一, 和泉比佐子, 他(2005)介護保険制度導入 4 年目における福岡県遠賀地区の要介護高齢者を介護する家族の介護負担感. 日本老年医学会雑誌, 42(4) : 411-416.
- 28) 広瀬美千代, 岡田進一, 白澤政和(2005)家族介護者の介護に対する認知的評価と要介護高齢者の ADL との関係 介護に対する肯定・否定両側面からの検討. 生活科学研究誌, 3 : 227-236.
- 29) 三浦宏子, 荒井由美子, 山崎きよ子(2005)在宅要介護高齢者ならびにその家族介護者における主観的言語コミュニケーション満足度の関連要因. 日本老年医学会雑誌, 42(3) : 328-334.
- 30) 深堀浩樹, 須貝佑一, 水野陽子, 他(2005)特別養護老人ホーム入所者の家族介護者における精神的健康とその関連要因. 日本公衆衛生雑誌, 52(5) : 399-410.
- 31) 鷺尾昌一, 斎藤重幸, 荒井由美子, 他(2005)北海道農村部の高齢者を介護する家族の介護負担に影響を与える要因の検討 日本語版 Zarit 介護負担尺度 (J-ZBI) を用いて. 日本老年医学会雑誌, 42(2) : 221-228.
- 32) 佐伯あゆみ, 大坪靖直(2008)認知症高齢者を在宅で介護する家族の家族機能と主介護者の介護負担感に関する研究. 家族看護学研究, 13(3) : 132-142.
- 33) 松本啓子(2007)在宅認知症高齢者の家族介護者における医療ニーズ測定尺度の開発. 老年看護学, 12(1) : 63-71.
- 34) 中原純(2005)痴呆性高齢者の家族介護における負担感 介護者の態度と介護状況を通して. 高齢者のケアと行動科学, 10(2) : 71-76.
- 35) 小澤芳子(2006)家族介護者の続柄別にみた介護評価の研究. 日本認知症ケア学会誌, 5(1) : 27-34.
- 36) 廣瀬春次(2006)在宅の認知症患者を介護する家族の予期悲嘆. 日本看護研究学会雑誌, 29(1) : 57-65.
- 37) 水島ゆかり, 前田修子, 斎藤好子(2005)在宅痴呆性高齢者の行動障害に対する介護者の認識 日本とイギリスにおける一地方の比較から. 日本地域看護学会誌, 7(2) : 49-54.
- 38) 小澤芳子, 戸村成男(2005)認知症高齢者の介護者による介護評価. プライマリ・ケア, 28(3) : 149-154.
- 39) 東野定律(2005)在宅要援護高齢者の問題行動と主介護者の介護負担感の関係. 日本保健科学学会誌, 7(4) : 250-256.
- 40) 丸山将浩, 丹治治子, 荒井啓行, 他(2005)要介護高齢者の在宅ケア 介護負担軽減に向けて 痴呆性疾患患者をもつ介護者における介護負担感と介護サービスの利用状況. 日本老年医学会雑誌, 42(2) : 192-194.
- 41) 尺土佳子, 宮本沙季, 水野ルミ子, 他(2007)在宅療養に移行した神経難病患者とその家族の生活の実態. 医療, 61(1) : 52-56.
- 42) 松村ちづか, 中山和弘, 川越博美(2006)主介護者の満足感に影響する在宅ターミナルケア要素に関する研究. 緩和ケア, 16(3) : 269-274.
- 43) 石井京子, 近森栄子(2005)高齢者への家族の看取り時の介護行動と介護行動に影響する要因に関する研究. 日本看護研究学会雑誌, 28(4) : 61-67.
- 44) 片山陽子, 矢嶋裕樹, 小野ツルコ(2006)在宅移行期の女性介護者における主観的な介護準備状況と心理的ウェルビーイングとの関係. 老年社会科学, 28(3) : 359-367.
- 45) 川野英子, 平野美穂, 鳥居央子, 他(2008)男性が主介護者である家族への生活力量向上を目指した支援. 家族看護学研究, 13(3) : 150-157.
- 46) 藤野成美, 岡村仁(2007)精神障害者の家族介護者における介護の肯定的認識とその関連要因. 臨床精神医学, 36(6) : 781-788.
- 47) 梶原江美, 忽那龍雄(2005)RA 患者における主介護者の介護負担感と疲労徴候. 日本看護研究学会雑誌, 28(5) : 63-70.
- 48) 佐藤敏子, 清水裕子(2005)女性介護者の蓄積的疲労徴候の実態と介護継続関連要因 嫁・妻・娘の検討. 日本在宅ケア学会誌, 9(1) : 46-51.
- 49) 大須賀恵子, 河崎文美, 水野多喜子, 他(2005)時間外電話相談充実のための効果的な対応方法の検討 - K 訪問看護ステー

ションにおける時間外電話相談の実態から考える．訪問看護と介護，10(8)：659-665.

- 50) 比嘉勇人，比嘉肖江(2005)在宅療養者と介護者の神気性(スピリチュアリティ)に関する要因分析．人間看護学研究，2：13-19.
- 51) 飯田紀彦，小橋紀之，岡村武彦，他(2005)新しい介護負担度評価尺度 ABC-16 (Assessment of the Burden on Caregivers) の信頼性と妥当性．日本老年医学会雑誌，42(2)：209-213.
- 52) 宮谷恵，小宮山博美，小出扶美子，他(2005)在宅人工呼吸療法中の就学児への介護時間に関する調査．日本小児看護学会誌，14(1)：36-42.
- 53) 橋本栄里子(2005)家族介護者の束縛感・孤立感・充実感尺度の開発とその信頼性・妥当性の検証．病院管理，42(1)：7-18.
- 54) 二村芽久美，須釜淳子，真田博美，他(2006)縦エアセルマットレスにおける自動体位変換機能の評価 在宅療養高齢者における体圧分散と介護負担に対する効果．老年看護学，10(2)：62-69.
- 55) 真砂涼子，平淳子，倉石愛子，他(2005)精油による在宅介護者の蓄積的疲労に対する効果．アロマセラピー学雑誌，5(1)：9-15.